

Tamagawa Adventure Programの15年間と これからの取り組み

Tamagawa Adventure Program of 15 years and future initiatives

大山 剛

Tsuyoshi Oyama

キーワード：TAP、学校教育、人間関係、高等教育

Keywords：Tamagawa Adventure Program, school education, human relations, higher education

概要

TAPセンターは、玉川学園・玉川大学の教育理念である全人教育の一端を担う施設として「心の教育実践センター」の名称で2000年4月に設立され、アドベンチャーを基盤とした体験学習プログラム（TAP＝玉川アドベンチャープログラム）の研究・実践及びプログラム開発を行っている。学内には、「チャレンジコース」と呼ばれる、国内では初めてとなるアドベンチャー教育のための施設が常設され、K-12、大学、大学院生のみならず、教育に携わる（学校教育・社会教育等）指導者を対象とした生涯学習のプログラム等、教育的なニーズに合わせた幅広い活動を展開している。

現在、学校教育には様々な資質・能力・スキルの育成が求められているが、玉川学園・玉川大学においても、従来の伝統的な教育ではなく、TAPによって“自ら課題を見出し、互いの関係の中で解決策を創造していく”ことができる人材育成を目指している。

個々と集団の持つ可能性を広げ、「常に学び・自ら行動を起こしていける人（能動的な学習者）の育成」をしていくことは、未来の日本社会を創っていくための人材開発の観点からも非常に重要で、その意味において、玉川学園・玉川大学におけるTAPの活用は、まさに全人教育の一翼を担う大きな役割を有している。

1. TAPの創設と当初の目的

TAP（Tamagawa Adventure Programの略、以後TAPと記す）は、玉川学園・玉川大学の全人教育の一端を担う施設として2000年4月に設立された。当時アメリカで教育手法として評価が高かった「アドベンチャーを基盤とした体験学習プログラムの研究・実践・開発を実施するため」である。そのために、学内にチャレンジコースと呼ばれるアドベンチャー教育施設を常設して、K-12、大学、大学院生等のTAP体験から始まり、教科カリキュラム内での活用、あるいは教育に携わる指導者を対象としたプログラム等、学校教育で求められる幅広い活動を視野に入れて始動することとなった。

所属：玉川大学 TAP センター

受領日 2016年2月2日

TAPセンター準備期間（1997-1999年）における教育目標は、以下の3点であった。

1. 生徒の自尊感情を高めること
2. 生徒に達成感を持たせること
3. 問題解決のためのコンセンサス獲得の方法について学ぶこと¹⁾

この導入には、児童・生徒の健全な成長を積極的・効果的に支援する教育実践の一つとして米国で注目されている「Project Adventure」²⁾を、全人教育活動の中に積極的に取り入れることによって、21世紀に必要とされている能力・資質の充実を図ろうと計画していた。準備期間にはProject Adventureの関係者に助言を求めながら、コースデザインの設定、指導内容の検討と研修を続け、そして2000年4月、全人教育研究所心の教育実践センターとしてスタートした。

開設時の指標として前述の3つの目標をさらに進め、「行動する全人教育」の名目で以下の3点を推進する使命を担った。

- ・アドベンチャープログラムの手法を導入したK-12の教育活動
※具体的には、強い心を育むプログラム開発および実践
- ・より望ましい人間関係を育成するためのプログラム開発および実践
- ・国際社会で活躍する人材の「心」を育てるためのプログラム開発および実践

(付記) 本稿ではTAPと表記しているが、過去の研究ではtapと小文字で記述されている。これは本年度より大学附置機関としての設置にともない大文字表記に切り替えたものである。したがって、その意味と内容は以前と同様で変化はないことを前提に本稿ではtapもTAPとして表記する。

2. 開設当初の各部の活動

センターを開設してから、しばらくは各部の兼担教員とTAPスタッフの共同作業による試行錯誤の連続であったが、次第にプログラムも進められるようになってきた。以下はその時期の各部の活動内容記録である。³⁾

〈幼稚部〉

2001年現在、3歳児から5歳児対象のプログラムは検討中。2000年2月と3月に保護者を対象にして希望を募って実施した。幼稚部生保護者のtap体験により、tapのコンセプトや活動に理解を示していただくためのものであり、今後3歳児から5歳児対象のtapを開発するための機会として有意義な機会であった。

〈小学部〉

小学部では、心の教育実践センターのropesコースが設立する前から、教育現場でのropesコースの利用に関心があり、数名の教員がropesコースを活用した国内外の講習会に参加して研修を続けてきた。当初、道徳や体育の授業の中で、ごく初歩的な手法を取り入れてその可能性を探っていたが、1997年から5年生林間学校の体験学習の一つとして2日間の活動に取り組んだ。

2000年から5・6年生を中心に、各クラス（男女混合、計39名）毎に、5・6月と11月の体育授業で、1コマ45分の授業を続けて90分間を週に1回行い、各クラス平均8週間をかけて実施している。また、年間を通して学級の時間、春休みや夏休み等を利用して希望者を募り実施している。

〈中学部〉

精神的・肉体的に成長著しい中学生時代に、思いやりや勇気、自己発見やチャレンジ精神を体験的に学習するために実施されている。たとえば、遊びながら仲間同士の融和を図るプログラムを学級経営に取り入れて、各クラブや委員会活動のリーダーを対象に「問題解決におけるグループ内意思決定の過程」を体験させるプログラム、海外研修旅行参加者を対象として、チャレンジ意欲の向上と「みんなと違うからおもしろい」という異文化交流の姿勢を体験させるプログラムなどを行っている。

〈高等部〉

責任感、自主性、正しい自己主張などの能力、そして自己概念の向上とチャレンジ精神を、高等部生活において発展的に活かすことを目的とする。高校生になると、視野や行動範囲がおのずと広がり、内面的にも自我意識が高揚し、新しい自我が目覚め、今までと違って自分自身の内界に関心を持ちはじめ、自己を確立していく時期である。

2001年4月から、2年生を対象に必修科目の中で「生活一般・tap」という授業が開講された。クラス（男女混合、計37～38名）ごとに、1コマ50分の授業を2コマ続け100分間で授業を行い、1週間に1回を平均7週にわたって行っている。また、自由研究という必修選択の科目で「Adventure」があり、その中でもTAPの手法を取り入れている。

〈大学〉

教育学科のフレッシュマンズキャンプ、課外活動のリーダートレーニング、ゼミやクラス単位、教育関連の授業、通信教育の学生に対して実施しているが、正課の授業への導入は、現在検討中である。

〈その他〉

玉川学園の新人研修、玉川大学継続学習センターでの一般公開講座、K市・I市などの教育委員会、M市役所、関東青年会議所、Y市幼稚園協会、企業などで数多く実施されている。国際交流プログラムとして、台湾稲江高級護理家事職業学校の高校生や米国ハーカースクールの子どもたちと玉川学園の児童・生徒達と一緒にいる。

こうした活動の中でも小学部では当時から、ローエレメント、ハイエレメントと呼ばれる活動エリアが小学部に隣接して設置され、加えてTAPスタッフの協力を得る機会に恵まれて⁴⁾多くの分野でTAPを活用することができた。小学部でのTAPのねらいは、より望ましい人間関係を育み、互いの協力によって達成感や充実感を実感していく中で、自尊感情を高めながら、強い心を育てようとするところにある。したがってTAP全体の目的は単に体育という一教科に留まるものではなく、本校の教育目標全体に対して包括的に含まれることになるが、大きく分けると、1. 体育カリキュラムとしてのTAP 2. 道徳教育、学級経営としてのTAP 3. 国際理解教育としてのTAPである。

3. 現在のTAPの目標

始動期のTAPでは、主に、小学校、中学校、高校、大学の各教育部門の中で個々に活動するのではなく、「行動する全人教育」を中心的なテーマとして包括的にとらえるとともに、各学部

実践を通して学ばせていくというアプローチが中心であった。

そして、玉川大学TAPセンターとしての現在では、次のように目標が示されている。

「現在の学校教育には様々な資質・能力・スキルの育成が求められています。玉川学園・玉川大学においては、従来の“教え込む教育”ではなく、TAPによって“自ら課題を見出し、互いの関係の中で解決策を創造していく”ことができる人材育成を目指しています。

個々と集団の持つ可能性を広げ、「常に学び・自ら行動を起こしていける人（能動的な学習者）」の育成をしていくことは、未来の日本社会を創っていくための人材育成という観点からも、非常に重要です。玉川学園・玉川大学におけるTAPの活用は、まさに全人教育の一翼を担っていくという大きな役割を有しているのです」。⁵⁾

そして、TAPにおける「学び」の特質として、

- (1) 相互尊重（フルバリュー）の心を学び、
- (2) 内発的動機でチャレンジすること（「人生の開拓者」たること）、
- (3) 自己や集団のVisionに向かって努力していくこと（Adventure）、

という視点を重視しながら、個人と集団の学びの過程に焦点を当て、学習者の成長を促していくことを明らかにしている。このように、K-12、大学、大学院における教育活動において各校、学級、ゼミ、学士力向上など教育実践の場における児童・生徒・学生の「個人とグループの成長」を目指した目標を達成するための支援活動を行っている。

4. 現在のTAP実践

4-1. 初等中等教育部門

前述のような目標を掲げながら2015年現在、TAPセンターが進めている授業や研修内容を以下に記述する。⁶⁾

1. 幼稚部

- ・オリエンテーションセミナー

対象：新入生（年少）の保護者

内容：保護者間のコミュニケーションを円滑にするためのプログラム

目的：保護者同士の親睦と相互理解

- ・アドベンチャープログラムの研修（月1回実施）

対象：幼稚部教員

内容：グループワーク及びグループプロセッシングに関する事例研究会における支援。

英語を使ったバイリンガルプログラムにおける表現活動に関する研修

2. 低学年

- ・4年生サマースクール

小学部（K-4）では毎年サマースクールが行われ、サマースクールの講座の中の一つにTAPがある。そして、2日間、グループで協力しながらハイチャレンジコースに挑戦し、自己発見を目的に活動する。

3. 中学年

- ・7年生

7年生は4月第1週に新入生オリエンテーション（3h）を実施

学級運営を早期に円滑にする。

- ① 内進生と新入生の温度差を解消する。
- ② 仲間の個性や多様性を認め、相互理解ができる機会とする。(新しい仲間作り)
- ③ ピアサポートができるようになるためのきっかけづくりとする。

平成27年度 年間約10回

毎月(8月と3月を除く)第1水曜日の1時間目と7時間目

学級の現状に合わせていくスタイル(学級のニーズに合わせた展開)

長所:学級担任と共に学級を作っていくことができる

短所:学級ごとに内容が異なる

※教育課程上の関連領域:道徳、特別活動(主に学級活動)

※非日常的な活動に日常を織り込んでいく。

- ・関連的機能概念:学級経営、生徒指導、道徳教育、キャリア教育
- ・その他:「特別の教科道徳」との関連(「礼拝」とも関連して)

今後の活用根拠として学習指導要領には「児童の発達の段階や特性等を考慮し指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れる」と指摘。

4. 高学年

- ・自由研究

授業時間:金曜日6、7限 10年-12年

主体的、自主的な活動を通して自己を高め、個々の研究活動を通して創意工夫、自律性、問題解決能力の育成を目指す。

(自由研究のテーマ例)

アドベンチャー研究部(自由研究)

学年 10年 クラス A 名前 B.C

研究テーマ:

豊かなコミュニケーションについて考える

円滑な人間関係づくりに必要なコミュニケーションスキルとは—「TAPの活動から考察する」

研究動機:

話し上手な人とは、会話をうまく広げることができ、また相手が面白いと思うような話題を提供することができる人だと思っています。相手の話に調子を合わせ同調するだけではなく、自分の話したいことを伝える(意思伝達が上手くできる)人だと思っています。会話では常に相手の顔を見て笑顔で話し、話すスピードや声のトーンを考えて話すことができる人だと思っています。そして会話をするのが上手なだけでなく相手の話に相槌を打ち相手の話をしっかりと聞き興味関心をもった態度で接する人だと思っています。

以上のことを考えて自身に当てはめて考えると、自身はまだ満足出来る到達点に達していないように思います。その要因は上記のスピードや声のトーンを考えて話すことや、笑顔を心がけて話すことが満足できる状況ではないと考えます。また相手の話を聞く機会を持つことは多いのですが、自分から話題を提供すること会話をふること、新たな話題やトピックを提供

することが苦手です。尚且つ、相手にただ同調してしまうことも多々あります。

今回のテーマ「豊かなコミュニケーションについて」ですが、その力を勝ち取るためにTAPでのコミュニケーションアクティビティを行うことでスキルがあがり、豊かな会話ができる人になれるのかを考えこのテーマを選びました。

・ 選択体育 12年生

授業時間：木曜日5、6限 前期31名、後期11名

体験活動を通した自己理解と他者理解から、良質な対人関係作りを学ぶとともに、ライフスキルの獲得を目指しキャリア教育も意識した授業作り。

・ 特別授業 10年生／9年生

年間を通して、5回ほど授業、約12コマの時間

クラス単位での活動

9年生は他者理解と人間関係。10年生は「人的環境整備」とグループ規範

・ 国際交流

稲江高校（台湾）とゲーテ高校（ドイツ）

稲江高校は年間を通して、3グループほど来園し、3週間の滞在中に約15コマの授業を展開し、グループ規範づくりとアドベンチャー理解の目的で実施する。

ゲーテ高校は年1回の来園時に、自由研究グループとの交流のなかで、異文化理解とアドベンチャー理解の目的で実施する。

4-2. 高等教育部門

a. 大学授業1

・ 101programs

First Year Experience（1年生）の授業としてコミュニケーションの向上、クラス内の交流としてTAPを導入している。

2015年の対象学部 文学部、工学部、芸術学部、教育学部

b. 大学授業2

・ 教職演習（授業）

教育学部の必修授業で一連のグループプロセスといった体験を通してファシリテーションを学ぶ。

c. 課外活動1

・ TAP Intern

TAPではインターンとして学生有志が募り、TAPについての勉強会や体験会など、自己の成長のためにアドベンチャーファシリテーションを通じて様々な活動を行っている。

d. 課外活動2

・ Leader Training

玉川大学部活動（体育会、文化会）における主将会の組織作りや交流をはかるためにTAPを実施。ここではインターンが中心となりファシリテーションを行っている。

e. 野外教育演習

・ Canada Outdoor Education Program

今年度で9年目となるこの演習は玉川学園学外施設であるナナイモ校地（Vancouver Island, BC）を拠点に玉川大学教育学部の学生が約2週間、カナダの大自然の中で過ごす。その内4泊5日でStrathcona Provincial Parkでのトレッキングキャンプを通じてOutdoor Educationを学ぶ。⁷⁾

4-3. 学外プログラム

TAPセンターは大学教育の附置機関として組織されており、基本的に学外への事業展開やプログラム提供を積極的に行ってはいない。しかし、過去15年間の実績と社会的な評価、そしてなにより、卒業生のネットワークから社会のニーズに対応するプログラムとして一定の評価を受けてきており、本学の使命と役割の範囲を踏まえてプログラム支援を実施している。そして、現在でもTAPを取り入れたい教育機関、企業人材教育、社会教育の領域、地域教育、福祉教育、医療現場など、プログラムの依頼は増加しており、TAPセンターにおける実践活動や研究活動の拡がりは大きいと考えている。

現在、玉川大学近隣の教育委員会では9委員会、地方の大学や学校、教育委員会、大学関係でも同等数程度の研修会や講演を実施している。また問い合わせの多い、企業からの新人研修依頼や人材開発研修なども、今後の状況を見ながら計画を進めたい。特に近年は町田FCゼルビアをはじめ⁸⁾、U-17日本代表、U-15日本女子代表、東京都国体選抜を含めて、Jリーグ等のサッカーチーム研修⁹⁾も増えており、スポーツへの有効性も次第に知られるようになっていく。

5. センターの新しい取り組みについて

TAPとして今後の課題と活動の方向、そして将来の展望について概略を以下に記す。今後のTAPの使命として、これからも精査しながら進めたいと考えている事柄である。

a. 学生インターン制度の設定とTAPファシリテーター認定制度の策定

TAPに限らずアドベンチャープログラムに代表される体験学習型の教育手法では、常に指導者の養成が大きな課題になっている。¹⁰⁾そこでTAPもまたプログラムの活用と普及のためにも人材を養成していく必要がある。したがって当初は学生インターン対象にして、卒業までの4年間での取得認定制度を運用するが、別途、卒業生や教員研修における認定制度のモデルも同時に進行させていきたい。そして、将来的にこのモデルを発展させて、TAPファシリテーターの段階的な育成を考える。

b. 大学におけるアクティブ・ラーニングのセカンドステップ

2000年4月にスタートしたTAPは、K-12教育活動の中で活用され、その効果についても一定の評価を受けている。¹¹⁾また大学の初年時教育（以下FYE）でも10年前から、教育学部を始めとして多くの学部でFYEプログラムの一部として学生がTAPを体験している。こうした学内の活動とともに学外からも、今日の教育環境の変化に伴い、これまでの教育方法に対する反省や閉塞感から、新しい教育の形としてのadventure programという「体験教育を基盤とした教育手法とその成果」に注目が集まり、15年前から地道に発信を続けている本学TAPにも大きな期待が寄せられている。

なぜなら、そこには、TAPの手法が、感情面、行動面、認知面のあり方に焦点を当てながら、内発的な動機を促し、個とグループの心理環境を整えることにより効果的な「学び」を促進する

からであり、その手法と考え方が、教室におけるアクティブ・ラーニング（知識活用型・知識習得型アクティブ・ラーニング等）をスタートにした「実践知」であると考えられるからである。¹²⁾

c. 教員養成課程におけるアドベンチャーカリキュラムの運用

TAPの持つ手法は、時に本学の教育信条のひとつである「人生の開拓者」と比喻されることもあるが、それ抜きにしても、現代社会の人と人の関係、教育、成長を支援するための教員養成課程においては、指導者に必要な考えやスキルを与えられると考えている。¹³⁾したがって本学の教員養成課程においても、アドベンチャーカリキュラムについて学ぶことは、有益な方法である。これから世界中の教育課程において体験教育、アドベンチャーをベースにした人間教育の意義とその価値が広がっていくことを予想する。なぜならアドベンチャーとは行動や活動ではなく、人としての「あり方」の本質を学ぶものだからだと言える。

d. アドベンチャーコースの改修及び再開計画

玉川学園・玉川大学は、ロープスコースの日常的な活用と豊富なプログラム内容や実践例の充実、すなわち「施設というハード」と「カリキュラムデザインというソフト」の両面での研究と実践において、一般の公立学校はもとより adventure program の導入を積極的に取り入れている私立学校の中でも他の追随を許していない。また、国内でこの手法と視点を持ち続けているのは本学だけであり、まさに先見の明を持って取り組んできたTAPは児童生徒・学生・プロフェッショナルが21世紀スキルの獲得を促進させる大切な要件だと考えている。そこで、次世代に続く新しいコースに向けた開発計画がいずれは必要と考えられよう。

e. アドベンチャープログラム推進大学との国際連携プラン

今後はTAPの体験教育の手法やアドベンチャーベースの教育法について、海外の大学との連携も必要と考えられる。交換留学制度（大学院）、欧米、オセアニア、アジアにおける教育実習（インターンシップ）の機会、指導者派遣等への発展が期待できよう。例えば人材開発・教育部門での発展、国際理解教育の領域での応用、メンタルヘルスでの支援プログラム等であり、海外では健康科学分野にも適用されている。この面から、今後の確保できる人材の専門性に応じてTAPプログラムの実践領域が発展していくことが予想される。それゆえ玉川学園・大学としての方向性と将来ビジョンと共に大学附置機関としての発展にも貢献できると考えたい。

おわりに

創立者は「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」という言葉を好んでいたが、Adventure Programの今日も日進月歩の観があり、2000年設置の頃とは施設や運用にも大きく変化が表れている。本学がこれまでの実践で児童・生徒・学生に有効であったハイエレメントやローエレメントを保持しながらも、例えばリーダーシップ育成やグループワークのトレーニングを含めた「アクティブ・ラーニング」という次世代の教育に欠かすことのできない総合的な展開も考えられよう。

玉川学園の全人教育は海外、特にROUND SQUARE校においてAdventure Educationの分野と密接な関係を有していると理解されている。¹⁴⁾また世界の国々で唱えられている21世紀スキルを始めとし、グローバルな視点と行動力、多様な文化を理解して他者と関われるコミュニケーションスキル、これらを持ちうる日本人を育成することが玉川の使命と考えている。

TAP開始から15年が過ぎて、TAPを経験した卒業生も増え続けている。自身が生徒や学生の

時にTAPを経験したからこそ今日に至っているスタッフもいる。そんな中で、これまでの「TAPって高いところにのぼるんだよね」という小さな子ども達の感想だけでなく「自分はTAPを通して〇〇を学びました」と前を向いて「新しいアクティブ・ラーニングの成果です。新しい体験教育の成果です」と開示できる次のステップに進みたいと考えている。

アドベンチャーは人の変容を促しながら良質の変化を目指している。人が豊かに生きることを願いながらTAPの発展をめざしていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 玉川学園 「玉川学園新規教育活動計画案」 玉川学園小学部資料 1998年
- 2) <http://www.project-adventure.org/> 2015年12月1日確認
- 3) 大山剛 「宮城アドベンチャープログラム (MAP) 研究会第1回研究会資料集」 宮城県教育委員会 2002年
- 4) 工藤亘 「体験学習による小学校5年生の自己概念の変容—玉川アドベンチャープログラム (tap) の実践を通して—」 玉川学園全人教育研究所 教育研究 第11号 2003年 pp.261-323
- 5) 難波克己 「Tamagawa Adventure Programの15年間と現在の取り組み」 学校法人玉川学園 全学園協議会 TAPセンター発表資料 2016年1月12日
- 6) 大山剛 「Tamagawa Adventure Programの15年間と現在の取り組み」 プロジェクトアドベンチャージャパン創立20周年記念シンポジウム発表資料 2015年10月25日
- 7) http://www.tamagawa.jp/education/dream_k12/detail_4139.html 2016年1月15日確認
- 8) http://www.tamagawa.jp/education/report/detail_8171.html 2016年1月15日確認
- 9) http://www.tamagawa.jp/news/news_release/detail_6184.html 2016年1月15日確認
- 10) 降旗信一、宮野純次、能條歩、藤井浩樹 「環境教育としての自然体験学習の課題と展望」 日本環境教育学会 第19号 2009年 pp.3-16
- 11) 難波克己 「動き出した心の教育—玉川アドベンチャー教育の取り組み—」 玉川大学学術研究所紀要 第12号 2006年 pp.107-114
- 12) 日本学術会議 「日本の展望—学術からの提言2010」 日本学術会議 2010年4月5日 第2章(5) pp.16-19
- 13) 青木幸子 「教員養成課程で育成すべき能力と実践的指導力」 東京家政大学博物館紀要 第14集 2009年 pp.1-18
- 14) <https://www.roundsquare.org/> 2016年1月17日確認